

# 姉妹都市モーガンヒル市の 日系アメリカ人の歴史

モーガンヒル市姉妹都市委員会  
ブライアン・シロヤマ氏 作

20世紀になろうとする頃、少人数の日系移民がモーガンヒル市の農場に移り住みました。その人たちの多くは、広島県や熊本県の出身で、農場では、すもも、アンズ、そしていちごが主に栽培されていました。

残念なことに、当時のカリフォルニアでは人種差別が横行していて、苦勞の多い生活でした。例えば、日系移民はアメリカの市民権を得られず、そのために自分の土地を持てなかったのです。1924年まで、アメリカ議会は日系人の移民を全く認めていませんでした。

そのような差別的風習があったにもかかわらず、1930年代の末まで何十年にもわたる日系移民の身を粉にした労働が、アメリカでの彼らと二世の子供たちの生活を序々に好転させ、やっと実を結び始めていました。しかし、不幸にも日本の真珠湾攻撃が、日系移民の生活を一変させることとなります。

1942年2月、ルーズベルト大統領は大統領令9066号を発し、モーガンヒル市をはじめ、アメリカ西部の全州から、日系一世と二世を一掃することを決定しました。

総数12万の日系人たちの大多数はアメリカ生まれの市民でしたが、戦時収容局が所管する10か所の大型収容所に強制収用されました。多くの日系人は、家を離れるまで1か月の猶予もなかったことから、あらゆるものを失い、農場や仕事を放棄せざるを得ませんでした。収容所暮らしは、1945年まで続きましたが、日系一世とその子供たちは辛い時代を耐え忍び、彼らの「我慢」の精神は決して屈することはありませんでした。

収容所から解放されたとき、ほとんどの日系人はお金もなく、帰る場所もない状況でした。いろいろな土地で生活を始めようと試みた後、ハナモトさん一家のように、多くの日系人家族たちが、最終的にモーガンヒル市に定住することとなります。新たな生活の糧を探していた日系人家族にとって、ドリスコルという名のいちご栽培者のもとで小作農をすることは、最も上手くいった仕事のひとつとなりました。日系人が、収容される以前から実直で、働き者であるという世間の評価を得ていたことから、ドリスコルは日系人労働者を欲しがっていたのです。

そうして多くの日系人労働者が新しい生活を始められるようになったのです。日系人労働者たちは、ドリスコルが用意した3つのキャンプに分かれて住み、互いに助け合いながら、30年前の日系一世たちと同様に、自分たちの生活を取り戻していきました。

いちご栽培の小作農を経て、何人かの日系一世や二世たちが自立しようとなりました。例えば、ハナモトさんの家族はキウイ農場を購入することができました。ほかの家族も花卉栽培、種苗や農場の経営に乗り出していました。戦後間もなくのモーガンヒル市での日系一世と二世の人口は、100人にも満たない数でした。

1950年代後半から1960年代にかけて、多くの日系一世たちは現役を退き、二世に仕事を引き継いでいます。1967年に建てられたモーガンヒル仏教徒コミュニティセンターは、日系一世と二世たちの寄付があって建設されたものです。

21世紀を向かえ、多くの困難に出会い、考えられないほどの苦しい時代を生き抜いた日系二世たちが、今、一線を退く時期になっています。日系三世や四世たちが、二世の人たちが退いたあとの指導的立場を引き継いでいます。モーガンヒル市の日系アメリカ人社会は、再び良い時期を迎えているのです。

1940年代から1960年代

マドロネ、モーガンヒル地域でのいちごの収穫



ホーレス・ニシジマ いちご摘み

第二次世界大戦後、南部地域では、いちご農場で働くことが、日系アメリカ人の一世（第一世代）や二世（第二世代）を経済的に支える重要な仕事となっていました。木製手押し車といちご用木枠は、いちごの収穫期に使った典型的な道具のひとつです。木製の木枠と手押し車を、背の低いいちごの植栽の間のあぜ道に沿って押しました。人がいちごの植列の端に向かって移動し、果実を手で摘み取り、木枠に入れました。



手押し車は、農場で働く人がそれぞれ作っていました。写真はハナモト農場で1950年代から1960年代に使われていたものです。手押し車の上のせられた木製の木枠は、”缶詰とジュースいちご”用に作られたもので、市場向けのいちごは、1ポイント（0.473リットル）の紙袋に入れられました。

手押し車、木枠と缶詰用いちごの写真



写真は、キハラ家の提供

日曜日であっても、いちごの手入れは日々大切な仕事でした。

写真はマドロネ第2キャンプで撮影されたもので、後方はドリスコルの建てた住宅です。

左手は、カズ・カワグチさんの家で、ハナモトさんの家が右手になります。



キハラさんの家族  
マドロネ・第2キャンプにて



写真の下部にあるのは、セコイア（杉）材の水路で、木製コルクで水量を調整していました。



カメオ、セイゴとジョージ・ハナモト 1946年



いちご木枠を手に、農場に立つショーゾウ・ハナモト氏 推定1950年代